

「殿堂」に何が

東京女子医大 医師逮捕

榊原門下 隆盛も

90年代から かげり

「東京女子医大は心臓外科の殿堂だった」。日本の心臓外科医療を牽引してきたかつての「女子医」を知り、今回の逮捕劇に一樣に驚きの声を上げた。

心臓外科手術が実験の域を出ていなかった六〇年代、女子医の榊原任教授(当時)は人工心肺装置を用いた手術で成功

率を飛躍的に向上させ、女子医の名をど

うろかせた。国内屈指の技術を誇る同病院では近年、患者やその家族との間でトラブルが相次いでいる。名門病院に何が起きているのか。

〈関連記事19面〉

上意下達の封建的な医局体制を嫌う優秀な医師たちが、榊原教授を慕って全国各地に集まり、各地に巣立った。女子医は紛れもない「トップランナー」だった。



眼

地方の病院に行くようになった」と嘆く。

明香さんの手術と同じ昨年三月、一歳か月の女児が女子医で心臓手術を受けた。事前の説明は「90%以上の確率で成功」ところ

ところが、「九〇年代に手術前は元気に歩いて

なっていた女子医のブランドにかげりが見え始めた」と、ある心臓外科医は言う。榊原門下の一人も、「臨床

剤で眠っているだけ」と繰り返した。MRSA(メチ

シリン耐性黄色ブドウ球菌)に感染していたことを医師たちが「面親が知ったのは、娘の死

後、真相を知るためカルテを証拠保全してからだ。九六年六月、女子医で心臓手術を受けた七歳の女児は、手術後おう吐が続いた。女子医側の説明は「大

か、症状は改善せず、不信感を抱いた両親は、翌年二月に訪れた別の病院で「残る治療は心臓移植だけ」と聞かされた。「手術で悪化したのなら、教えてほしかった」。同年四月に娘を失った両親は、今も女子医の態度を許せないでいる。

明香さんの事件について、医師でジャーナリストの富家孝さん(55)は、「事故自体よりも、事故を隠ぺいしたことが問題」と指摘

する。「逮捕されたのは、女子医の中でも最先端医療を行う日本心臓血圧研究所

の医師だ。『自分たちは何をやっても許される』と勘違いしていたのではない

か。鬼手仏心——鬼のような

高度な技術を身につけ、患者には仏の心で接すべし。榊原教授の言葉が忘れられないという門下生の河村剛史・兵庫県立健康センター所長は、「他大学のレベルも上がり、女子医も普通の大病院と変わらなくなった。一つの時代が終わったのかもしれない」と、憂う。

女子医大小児心臓手術事故

解説 「殿堂」に何が

2002年6月29日 読賣新聞夕刊